

中
ト
キ
ス

昭和二十三年三月二十八日運輸省特別政令第三六二號
昭和二十一年十月三日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行）
平成二十二年二月一日発行（第四百十三巻第二号）

木下武人

二 月 号



俳句随想 「三百三十二」

汀子

虚子没後五十年という節目になった平成二十一年を振り返って、記念となるべきイベントを成功させたと自負し安堵している。財団法人虚子記念文学館の全ての展示と、虚子を顕彰するべく計画したイベントはその場所を横浜の近代文学館という場所を借りて開催することが出来たことにも大きな意義があったと思う。延べ六千五百名という参加者がそれぞれの感慨を抱き、地方に持ち帰ってそれらを正しく伝えられ語られたことであろう。明治維新の話が司馬遼太郎『坂の上の雲』という小説を通して語られているが、NHKによってドラマ化され番組が始まった。

虚子の生きて来た時代の様々なことを少しは知り得ることも大切ではなからうか。

俳誌「ホトトギス」を虚子が東京で主宰して発行して行く経緯は今なお正しく伝わっていないのであるが、その辺りのドラマはここでは取り上げられないであろう。家庭を持ち生活する手段として文芸誌を発行して行きたいと思った虚子が子規に相談した時、たまたま柳原極堂が松山で発行していた「ホトトギス」を辞めたいと子規に相談しに来たのである。このような偶然が重なって、「ホトトギス」は虚子が文芸誌として発行、それを子規が援助したのである。

句日記

汀子

平成二十一年二月一日 関西野分会

風邪とどめ得ざりし旅のあることを
かがみ見ること片栗の花を見る
もしかしてあれはさうかと獺祭
はる　　と彼の出席春隣

旅終へて春を近づけをりにけり

二月一日 下萌句会

春といふ言葉の中にある旅路
雪雲の山より海へ伸びて来し
そののちを咲き継ぎゆきし室の花

二月二日 ロイヤル俳壇

早春の影も明るき朝かな
目つむれば眠りに落ちん風邪心地
幾度も替へてマスクの顔となる

二月七日 芦屋ホトトギス会

朝夕の油断は春といふことば
薄氷の消えて狭庭に池二つ
大地よりつんと末黒の芒かな

二月九日 悼 山本紅園様

うららかに天寿全うされしこと

二月十日 大阪倶楽部

予報には従ふ旅程春寒し
早春の日々に馴染みてゆく仕事
紅梅の咲けば降り立つ庭の朝
大阪へ雲伸び六甲山の春
紅梅に天寿全うされし人

二月十日 綿葉倶楽部

春時雨ありたる町を抜けて来し
近づいて来しと心に抱く春
みよし野の春告鳥も待ちくれし

二月十二日 清交社

水に影落として光る猫柳
猫柳水面をすべり来し風に
旧正を祝ふ神戸の一部分
明るさを集め水辺の猫柳
針納め来しとそのまま出る出先
着飾りて集ふ先あり針供養

二月十三日 工業倶楽部

又逢ひて二月礼者ともう言へず
春寒を託つことなく旅終る
春寒き表情捨てて集ひ来し

二月十七日 有恒俳句会

春寒を託つを承知せる出先
春寒の話の鰯を立て直す
春の雪とは消えさうに舞ふことよ
紅梅の濃淡遅速あることを
忘れものせしと気づきぬ春浅し

二月十七日 無名会

早春の小さき鰯のまま終る
さつきまで舞うてをりたる春の雪
近づいて来る早春のはかりごと
七回忌とは早春の心もて
水音につかず離れず猫柳

二月十八日 夏潮句会

紅梅の散るやささめく水面かな
頼りたる子規の弟子たち鳴雪忌
皆触れてみる活けてある猫柳
春寒き庭の順路にありし池
ミモザ咲き生誕祭の近づきぬ
早春の心通ひぬ七回忌
池一つ増え春寒き庭となる

二月二十六日 きさらぎ会

東京へ持ち来しやうな春の雨
ふと季節あともどりして春の雨
大阿蘇の野焼の日取り定まらず

二月二十七日 時雨句会

治りたるばかりを忘れ春の風邪
簡単に治りしことも春の風邪
海荒れてゐても焚かるる磯竈
雨雪に雪雨になりさうに春
山の風吹きおろし来る獺祭
片栗の花に日の射し日の翳り
春の雪昨日の記憶遠ざかる
常識といふ片栗の花の向き

廣太郎句帳

廣太郎

平成二十一年二月一日 はせを句会

初場所や朝青龍といふ現
日脚伸ぶ自分の影に見惚れつつ
三寒のカノン四温のフーガかな

二月十四日 一水会

春浅し俳磚の文字なぞる指
路の臺北の大地の目覚めかな

二月三日 蕉心会

この猫も獺の祭をして来しか
雪解水湛へて川の嵩となる
孤高とは猫の瞳にある余寒
鉄といふ暖かき橋の色
春立ちて波立ちて我座りけり
交叉してスクリュー音の春めける
雲が出て風が出て川冴返る
春めくとネクタイだけが褒めらるる
鳥帰るふりをしてゐるだけの舞
おおい君 鳴それとも帰る鴨

二月九日 朝日カルチャー若草句会

春時雨京の路地てふ出会かな
紅梅の順路とは白抜けてより

二月十一日 土筆会

犬ふぐり日本列島目覚めゆく
紅梅の香りは風に逃げ易き
俳磚の千基を指呼に木の実植う

二月十七日 草木瓜会

風柔らかくやはらく初音聞く
尖りたるしよしゆんの風でありにけり
早春の息吹道路の割れ目にも
鶯の声太陽を引つ張れり
早春やネクタイ一寸派手ぢやない
鶯を誘ふ枝の角度かな

二月十八日 「俳壇」出句

早春の館開館の日を指呼に
春時雨俳磚の文字尖らせて
木の実植う文学館の未来へと
梅が香に押され館への一步かな
俳磚を確かめもして鳴雪忌
実朝忌虚子の自筆の謡本
デスマスクバレンタインの日の笑顔
記念樹の梢の先より春来る

二月十八日 登高会

波稜草湯気まで染めて茹で上がる
春の風邪鬼の霍乱てふ漢
花粉にも加勢されたる春の風邪
牧場の鶯自由牛不自由

二月二十一日 六甲会

路地といふバージンロード猫の妻
ひらがなのやうに梅が香曲り来る
梅が香に花粉症遠ざかりゆく
梅が香の仄と虚子館でんとあり
白梅に館の未来のありにけり
猫の恋昔私もああでした
恋猫よちよと演歌でも聴きなはれ

二月二十一日 虚子館投句

子規も来よ二月二十二日の館

二月二十四日 若水句会

鶯の谷渡して杉の黙
日を弾く白梅風を解く紅梅
雪解川六甲風従へて

二月二十五日 目黒学園句会

虚子生れし時もかくやと梅香る
残雪や軍靴の音を近付けて
恋猫のクラシック調ポップ調

廣太郎選

青空といふ日の増えて秋桜 赤き色とばして曼珠沙華となる	熱海 嶋田一歩
花 芒 箱 根 千 石 原 揺 ら す	同
風ふいにコスモス畑かきまぜて	龍ヶ崎 今橋眞理子
コスモスの色の中へと風迷ふ	同
秋桜風にもたれて咲いてをり	同
榛名富士すつくと朝の藤袴	神戸 山田弘子
穂を解きし芒のまつさらな言葉	同
人の息ふれて濃くなる松虫草	同
曼珠沙華生生流転語る赤	同
とんぼうの群風誘ひ子等誘ひ	同
ノクターン聴きまどろみの居待月	同
草々の霧の重さの匂ひかな	東京 橋本くに彦
濃く薄く軽く重たく霧の黙	同
雨止みてより沼霧の匂ひかな	同
霧走る山湖を銀に塗り替へて	渋川 木暮陶旬郎
濡れてゐる青空濡れてゐる花野	同
秋の蝶 雨の鎖に捕はるる	同
羽田にてワイン千歳にて生ビール	東京 大久保白村
二日目は牧にビールの酔を抜く	同
白服の主 宰 スー ツ の 副 主 宰	同
こほろぎの髭まで鳴いてをりにけり	鹿児島 坂口麻呂
野の風のみな赤とんぼ乗せてをり	同
街の灯の隅にこぼせる夜業の灯	同

雑詠句評（二月号より）

美奇・眞理子・保佳
芳子・千鶴子・とほ歩
葉・憲明・むつみ
中正・静龍・廣太郎

黙祷の子らに 八月十五日 鳥取 棕 誠一郎

八月十五日と言えば、終戦記念日、敗戦日、敗戦忌である。

昭和二十年八月十五日、第二次世界大戦は終わった。日本はポツダム宣言を受諾、天皇はラジオを通じて国民に終結を伝えた。以後、国の再建、復興、戦没者の慰霊を行っている日なのだ

戦争を知らない子供達もこの日は皆で黙祷をする。戦後六十四

年、多分作者も戦争を知らない世代ではなからうか。

こんなに長々と書いたことが、「八月十五日」「黙祷の子ら」に集約され、余韻の深い一句となった。（美奇）

この度の歳時記改訂で採用が決まった「終戦記念日」の傍題である「八月十五日」を詠んでいる。御存知のように昭和二十年太平洋戦争中であつた「日本海軍」がポツダム宣言を受け入れ無条件降伏をした日である。この重たい季題をすっきりと詠まれた事に詩情が感じられる。（廣太郎）

夏霧の何も見えざることが景 神戸 山田弘子

朝の高原などで夏霧を目にすることがあるが、太陽が高くなるにつれて何ごとともなかったように晴れていく。夏霧から思い起こされる高原の景と心地良い涼しさ。やがて見えてくる眺望を待つ期待のようなものも伝わってくる。「何も見えざる」という表現が却って隠された景への想像を誘う。機知に富んだ詠みぶりはっとさせられた。（眞理子）

例えば六甲山では夏になるともう霧の深い日が多くなる筆者もそんな深い霧の中を運転した事があるが、本当に全く周りが見えなくなってしまう瞬間もある。しかし霧に閉ざされて、視覚的には真つ白な世界であっても、それを景と捉えた作者の確かな写生眼が見て取れる。（廣太郎）

（以下略）

天地有情

空港も龍馬と名付け天高し	島原	平尾圭太
龍馬像太平洋の懐手	同	
屋根を打ち抜きし屋上星月夜	京都	安原 葉
階昇り出でし屋上星月夜	同	
坐せばすぐ居眠りつづく残暑かな	たつの	浅井青陽子
ひよろひよろと出で来る二人梨の園	同	
終の玉ちりと線香花火消ゆ	東京	稲畑廣太郎
手花火の消えれば星と語る闇	同	
初瀬道乏しき棚田穠生ふ	樺原	稲岡 長
本堂の幡を揚げば初時雨	同	
亡き御霊遺し賜ひし芒かな	神戸	長山あや
未枯るるとは大淀の流れにも	同	
去年今年詩累々とありにけり	福山	竹下陶子
行年やまだ現役といへる自負	同	
まのあたりする神奈備の曼珠沙華	神戸	後藤比奈夫
緑米穫れて明日香は豊の秋	同	
封印のカーテンを解き窓の秋	宝塚	水田むつみ
風暮れて水暮れてゆく庭の秋	同	

朝露のごとくに満ちて来るもの	熊本	岩岡中正
露けしやわれが歩けば山も歩く	同	
大いなる月を放ちし芒原	神戸	山田弘子
蚯蚓鳴く虚子学びても学びても	同	
長老のなほ藤袴いとほしむ	吹田	宮崎 正
藤袴文庫開かれ秋日和	同	
しづもれる花野の色をほどく風	箕面	井上浩一郎
住まれぬしままに家あり秋の草	同	
雁の頸あげ風を聴いてをり	東京	内藤呈念
コスモスや信濃に多き美術館	同	
露の世の人を渡して橋いくつ	八尾	岩垣子鹿
秋蝶を見送る高さありにけり	同	
町内会副会長来松手入	熱海	嶋田一步
行くほどに富士見え野菊晴となる	同	
仙人掌を植糸替へる日を又延ばし	同	嶋田摩耶子
かなかなや病良くとも老いつづく	同	
名月の輝きわたり人病める	東京	今井千鶴子
秋風にのせ一片のわが祈り		

子選

天地有情句評

汀子

手花火の消えれば星と語る闇 東京 稲畑廣太郎

手花火に興じる家族。

初瀬道乏しき棚田 穩生ふ 樺原 稲岡 長

初瀬道の穩田となつた情景に心を寄せる作者。

空港も龍馬と名付け天高し 島原 平尾圭太

亡き御靈遺し賜ひし芒かな 神戸 長山あや

高知空港に元氣に降り立たれた作者の訃報は信じられない。

芒に宿る亡き人の御靈に触れて。

屋根を打ち抜きし屋上星月夜 京都 安原 葉

行年やまだ現役といへる自負 福山 竹下陶子

星を観るための屋上の完成に寄せる興味。

今年も終わる感慨と自負。

坐せばすぐ居眠りつづく残暑かな たつの 浅井青陽子

まのあたりする神奈備の曼珠沙華 神戸 後藤比奈夫

百歳を健康に迎えられた秘伝を垣間見る秀句。

一面曼珠沙華に覆われた神奈備を見た現実の感動。